

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

<史料館だより>

目 次

| | | |
|------------------------------|------|----|
| ◇館長退任のごあいさつ | 杉浦昭典 | 2 |
| ◇地域と歩み、地域と生きる | 大国正美 | 2 |
| ◇横光利一の小説『紋章』と永田酒造 | 大国正美 | 3 |
| ◇夙川八景 — 打出焼 — | | |
| ・八景が描かれた打出焼 | 藤川祐作 | 9 |
| ・みね子氏讃の「夙川八景」 | 樋口元巳 | 10 |
| ◇トライやる・ウィークと史料館 | 水口千里 | 12 |
| ◇資料登録カード刷新 | 水口千里 | 13 |
| — データベースとの連携 — | | |
| ◇史料館だよりのPDF形式による電子化と公開 | 高田祐一 | 14 |
| ◇深江文化村講演会と「深江塾」の始動 | 大国正美 | 15 |
| ◇史料館日誌抄 | 道谷 卓 | 16 |

2010. 3. 31
NO.38

岡田善蔵村長宅の端午の節句

昭和7年(1932)ごろと推定される。岡田善蔵は、文久2年(1862)に岡田茂左衛門の次男として深江生まれ、明治20年(1887)分家(通称、南岡田家)を起こした。本庄村会議員、武庫郡会議員、同郡会議長、本庄村長などを歴任、昭和12年死去した。「生活文化史」34号参照。写真左から善蔵、妻とよ、長男の嫁ヒサ子、孫の昌三、長男貞治(岡田堯至氏提供)。



神戸深江生活文化史料館

館長退任のごあいさつ

史料館前館長 杉浦昭典

平成二十一年三月三十一日をもって史料館から引退しました。

館長就任は平成四年四月一日、深江財産区管理会で村史編纂を担当されていた志井正夫委員の徳憑により、当初は、既に進行中の村史編纂が間もなく完了して出版される筈のがかなり遅延気味なので中へ入って促進して欲しいという趣意でした。しかし、現実にはほとんど形を成さず、まだ緒に就いたばかりの感あるのみで新米館長としては戸惑う一方でした。そうこうする内に突然の大震災で編纂作業が中断したのは真にやむないことでした。

平成十六年三月「地理・民俗編」、平成二十年二月「歴史編」と分割して『本庄村史』全二巻が漸く完成しました。ただ一つ、村史編纂の進捗状況を常時懸念し続けて来られた志井正夫委員が最初の「地理・民俗編」出版をも見ることもなく他界し、故人になっておられたことだけは今なお痛恨の念に堪えません。

大震災とその事後処理、その他史料館の日常的な展示と開館業務につきましても、それぞれ専門分野の異なる館員諸賢のご尽力とご協力により、太過なく全うすることができました。

個人的には、村史出版と開館二十五周年の記念行事を完了した時点で私も年齢が八十歳を超え、私鉄を乗り継いで片道小一時間かかる史料館への通勤に少々疲労を覚えるようになっていました。史料館業務とは別に、館長在任中、神戸商船大学在職中に専攻していた海事に関連して、想定外の新たな著書三冊、翻訳本一冊および監修本七冊を各社よりの要請に応じて執筆できました。これはひとえに

史料館という文化的雰囲気の中にあつたお蔭という他ありません。史料館並びにご関係の皆様へ、十七年間の長きにわたったご好誼に深謝し、厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

地域と歩み、地域と生きる

史料館館長 大 国 正 美

杉浦昭典館長の退任を受けて、館長に就任して早くも一年が過ぎました。一九八三年の春、史料室の時代からかわり、早くも三十年近くになろうとしています。八七年九月に田辺真人初代館長がニュージーランドのマッセイ大学講師として離日されたときに館長代行となり、九二年に杉浦館長が就任してからは副館長として、本庄村史の編纂にかかわってまいりました。

村史は長い間お待たせをしてなんとか刊行しましたが、調査はまだ不十分です。また小学校の団体見学、トライやるウィーク、区役所職員の研修など、さまざまな役割を求められるようになりましした。その一方、古参のメンバーは仕事が忙しくなり、史料館に時間を割きにくい環境になっています。

こうしたなかで、史料館はもう一度原点に返って、「地域とともに歩み、地域と生きる」ことを基本にすえたいと考えています。幸い、昨年開催した深江文化村の講演会をきっかけに「深江塾」なるチームが生まれました。微力ですが、史料館を生んで育てていただいた地域からの恩恵を忘れず、できる限りのことをやりたいと思います。前館長同様、ご支援お願いします。

横光利一の小説

『紋章』と永田酒造

史料館館長 大 国 正 美

横光利一の小説『紋章』および『続紋章』の主人公のモデルが、昭和十一年から、戦後にかけて深江に居住していた。江戸時代から続く深江の酒造家、永田家の蔵を使って、特許を持つ松葉酒を濾過し瓶詰めしていた。永田家に生まれた浅野猪子さん（深江南町二丁目四番三号在住）からの聞き取りで『紋章』のを知り、合わせて永田家の平面図や間取りなどを聞き取ったので報告したい。

永田家の系譜

永田家は、初代を惣兵衛といい、大石村の酒造家に奉公して醸造技術を学び、平次郎の代の寛政五年（一七九三）には酒造米高一六八石の酒造家として史料に登場する（『灘酒沿革誌』）。ただしこの時は魚崎村に蔵を持っていたようである（『本庄村史』歴史編四六六頁）。その後、享和二年（一八〇二）酒造米高五四七石六斗五升、天保前期（一八三〇年代前半）に酒造株一〇九五石三斗を所有し、八〇〇石前後を造っている。三代目平治（次）郎のころに急成長し、伊丹の酒造家小西家とも関係を持ち「灘の極上」と言われ、長州藩にも酒を送り、藩主に謁見したという。長州藩の儒学者、長三州から贈られた書が現存している（『同』四六八頁、四九五頁）。幕末には伊丹の酒造家・石橋屋新太郎の酒造株一七二四石七斗も一年単位で借りて酒造をしている。当時の銘柄として「戎鯛」が幕末の「流行酒銘録」という木版刷りに刷られて流布した。永田家はこう

【永田家系図】



して得た財力で土地・家屋を集積、近代には地引網漁業権なども取得した。明治には深江の酒造業は衰退するが、永田家は大正期になっても永田亀吉が「祥瑞」の銘柄で酒造を続けている（『同』五九七頁）。

亀吉氏の次男為一（明治二十八年九月生まれ）は村会議員などを歴任した。兄の司郎（菊沢松風）は盲目だったが、琴の名人で紫綬褒章を受章した。系図にあるように猪子さんは為一の次女として大正十二年（一九二三）二月に生まれた。尋常高等小学校、明石女子師範学校を卒業後、教員となり、尼崎・難波小を皮切りに本庄中、山手小・精道小（芦屋市）、杭瀬小・梅香小（尼崎市）を経て昭和四十二年（一九六七）に梅香小を最後に退職された。

以下は浅野さんが父から聞いた話である。江戸時代、永田家が酒造をはじめたのは土地集積が進み余剰米が多くなったため、その活用が目的で、米屋か酒造かの選択肢の中で、酒造業を始めたという。創業年代については『武庫郡誌』には天明六年（一七八六）と書かれているが、正確な年代は聞いていない。ただ大正十二年（一九二二）の関東大震災で焼失した東京の店と蔵の写真（図1、『本庄村史』歴史編、五九六頁）には、「本家創業百五十年記念大売出し」

の看板があり、逆算すれば、創業年代は安永二年（一七七三）以前となる。『武庫郡誌』が天明六年とした根拠は明らかでない。

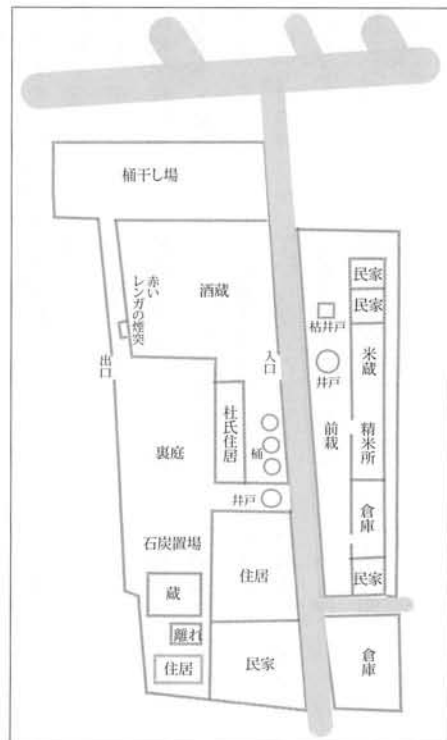
往時は、永田家は深江に四カ所酒蔵を持っていたが一カ所が火災に遭った。また海運にも進出し嘉永六年（一八五三）には酒造家の出資を募つて一五〇〇石積みの明徳丸を建造（『本庄村史』歴史編、四九六頁）、別に明栄丸を所持している。しかし遠州灘で難破したこともあったとい、時化の時に陸で松明を炊いて無茶苦茶に走り、航路を迷わし難破を誘発し、積荷を持ち去る略奪集団があったという。永田家もこうした被害に遭い、難破した時には船金庫と羅針盤しか残らなかったと伝える。

東京の支店は為一の弟周作の中学の恩師が周作と一緒に上京し、支配人として切り回していた。大正十二年の関東大震災の時は、為一はビール瓶に水を入れ、餅を持って上京したところ、自警団に不審者として捕らえられ警察署に連行されたエピソードもあった（『神戸新聞』二〇〇一年八月三十一日付、浅野猪子さんの投稿）。



図1 永田屋本家東京支店での創業150年記念の大売り出し
(永田健氏提供)

図2 永田家酒蔵とその周辺
(浅野猪子さんが記憶に基づいて作成したものを、現在の住宅地図の上に落とし、水口千里研究員が作成)



関東大震災で東京支店は焼失、温度管理に失敗して酒を腐らせることなどもあり、経営が急速に悪化した。為一は村会議員をしていたこともあり、酒造は為一の伯父、山下八介が代わって営業していたが、それも昭和前期に廃業したようである。山下八介は亀吉の義兄で、菊正宗の番頭を務めており酒造経営に明るかった。

永田家の酒蔵と住居

永田家の旧酒蔵は広大な敷地だった。浅野さんからの聞き取りを基に当時の風景を再現してみよう。

【酒蔵とその周辺】図2

図2は浅野さんの記憶をもとにイラスト風に当時の敷地を復元したものである。縮尺は必ずしも正確ではないことをお断りしておく。北端は桶干場で、二〇〇坪くらいはあった。この桶干し場で、明

治神宮へ奉納する樽酒を馬車に積んで撮影した写真が残っている（図3、「本庄村史」歴史編五九七頁）。写真によると、「祥瑞醸造元 永田屋本家」と染め抜いた法被を着た蔵人、「明治神宮御用」 「清酒祥瑞醸造元 永田屋本家謹納」と立て看板を付けた馬車が写っている。酒蔵は瓦葺きだが本瓦ではない。桶干場は雑草が茂っていた。大正時代と推定される。

酒蔵は女人禁制で、西側には赤レンガの煙突があった。南側にも大きな桶が置いてあった。門を出たところの南北道は酒の運搬のために作られた私道だった。この道を挟んで、門の東正面に大きな井戸があり、井戸枠が高く、上り段が付いていた。酒造りに使われる水は船と馬車で西宮の宮水を運んでいたが、この井戸からも汲み上げ、バケツリレーで運んでいた。北側の井戸は枯れていてその北側には柿木、桑の木が生え、私道側にはカラタチの垣が二間ほどあった。大井戸の南側、精米所や倉庫、民家までが棟続きで、精米所と米蔵には仕切りもなかったようである。民家



図3 大正時代の永田屋本家の蔵と桶干場
明治神宮への献上に出発する前に撮影（永田健氏提供）

を挟んでさらに倉庫があった。西側にはごろごろした石が並べられ、道はたにはムラサキツクサが多く生え、前栽と呼んでいた。石と精米所の間には松の木が数本生えており、その南にざくろの木、シヤクヤクがあった。家の前は砂地だった。

【住宅】図4

杜氏の住居の南側に永田家の本宅があった。現在の深江ハイツを建設する時まで建物があった。私道側の壁面は下が板、上が白壁で、二階部分は明かり取りがなく、屋根の鬼瓦もなかった。家は道路から五〇センチほど高く建ててあり、段差があつて、入口には敷石が置い

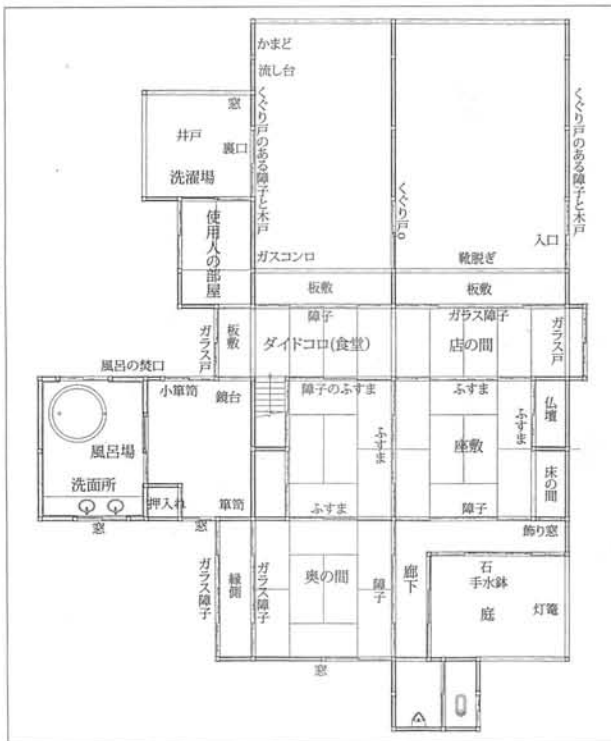


図4 永田家本宅の平面図
（浅野猪子さんが描いたものを天藤公夫氏が製図、水口千里
研究員が加筆修正）

であった。ガス灯があり、電気・ガス・電話は浅野さんが幼いころからあった。入口は一間の木の戸と障子の入った戸が二重になっており、障子の戸にはくぐり戸が付いていた。入口を入ると土間があり、板敷きがあった。来訪者は、板敷きに腰掛けて用件を済ます人、クツヌギで靴を脱いで奥の店の間に上がって用件を済ます人、さらに奥の座敷まで入る人の三通りがあった。店の間と板敷きの間との間には障子があり、下は板、真中にガラス、上が障子となっていた。表の土間からくぐり戸をくぐって奥に入ると土間の炊事場で、流し台、かまど、ガスコンロがあった。またここにテーブルがあった。ガスコンロと流し台の間に一間の木戸と障子の戸がある裏口があり、洗濯場につながっていた。洗濯場には井戸があり水をポンプでタンクにくみ上げた。洗濯場からセメントで固めた道が酒蔵の裏庭に続いており、脇にはアジサイやだいの木が植えられていた。裏庭では小さい桶や酒の絞り袋を干した。

炊事場の土間に続いて板敷きがあり、その下に引き出しがあり収納スペースになっていた。障子を隔てて板敷きの奥にダイドコロと呼ぶ畳の間がありここで食事を取った。ダイドコロと店の間は、ともに板敷から二〇センチほどの段差があった。ダイドコロの奥に小さな板敷きがあり浅野さんら子どもの勉強する空間だった。さらにこの板敷に続いて「ボンサンの部屋」「オトコシの部屋」と呼ばれた男の使用人の部屋に続いていた。台所より奥の六畳間、さらに奥の八畳間が寝室だった。台所と寝室の間は上に障子の入ったふすまで区切られ、また奥六畳間に続いてタンスの間があり、ここで着替えた。タンスの間からガラス戸を経て洗面所、風呂場に続いていた。洗面槽は白い瀬戸物で出来ていた。洗面所の外にはイチジク、ミカンの木、奥の寝室の外にはエンジン、松、桐、グミの木が植えられていた。

座敷は仏壇と床の間のある客間で、仏壇は白鶴酒造の嘉納家から譲られたものだという。中庭には直径一メートルもある手水鉢、灯籠があり五葉松、椿、ヤツデなどが植えられていた。

二階は中二階で六畳間があり、雛人形などを飾った。ほかは板の間で物置にしており、草履を履いて歩いた。

本宅の南側には十畳間だけの別棟と、離れの四畳半・八畳・六畳の家があった。離れは船をまだ持っていたころ堺から移築した。亀吉がしばらく住んで空き家になっていて、本庄小学校の校長が住んだり、防潮堤工事の事務所として使われたり、夏は避暑の別荘代わりに貸したりしていたが、昭和九年（一九三四）の室戸台風で船が座敷まで入り込むなど大きな被害が出た。今は六畳・八畳部分を改造して永田健氏が暮らしている。

小説紋章の主人公のモデル・長山正太郎

さて永田酒造の廃業を受けて、昭和十一年（一九二六）から永田家の酒蔵を使って、水戸出身の発明家長山正太郎が松葉酒の瓶詰めを始めた。長山については南信一氏の詳細な年譜研究などがあり、近年親戚の長山靖生氏が『奇想科学の冒険 近代日本を騒がせた夢想家たち』と題する著書の中で取り上げ、知られるようになってきた。以下、主に南氏作成の年譜や当時の新聞などから長山正太郎の歩みを、永田酒造との関係に重点を置いて述べよう。

正太郎は明治二十七年（一八九四）三月、茨城県多賀郡国分村下孫で、長山蔵次郎の長男として生まれた。長山家は代々村役人などを務めた有力農民だった。正太郎は高等小学校を卒業後、飼料会社を設立して失敗、醤油が高騰していたことからサツマイモやエンドウ豆から醸造することを思いつくがこれも行き詰まった。魚から醤油を造ることを思い立ち、昭和元年（一九二六）長山水産研究所を

設立、昭和四年水産醤油会社とした。本社を大阪市に、工場を富山県氷見町（現氷見市）に置き、翌年魚醤油製造法の特許を出願、同七年に特許が認められた。

この年、正太郎は横光利一に体験記を頼まれ、これをもとに横光利一が小説『紋章』を執筆、昭和九年に雑誌『改造』に連載され好評を博した。ただ北陸地方は浄土真宗の信者が多く、魚を使った醤油は販売不振で、会社の資金繰りに行き詰った。

正太郎は昭和十一年一月、水産会社を清算、阪神打出の内浜、伊東徹斎（伊東鍼灸院）方に寄寓した。当時の長山正太郎を、昭和十一年二月二十五日付の「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」は、「特許権七つを取消し社会へ投出す／苦闘二十年の水産関係発明家／小説『紋章』のモデルの美挙」と、顔写真入りで紹介。「二十年の永い間赤貧とた、かひつつ発明した貴重な水産関係の特許品七つを一般社会へ提供し国家の福利増進を計らうといふ発明家がある」と持ち上げている。正太郎は、水産関係の七つの特許を処分するとともに、昭和十一年『魚畜類之新利用法』という著書にまとめた。

永田家酒蔵と松葉酒

長山正太郎は昭和十年（一九三五）ころから松葉を使った薬用酒、松葉酒の醸造研究に取り掛かっている。そして昭和十一年七月、生松葉から滋養飲料を醸造する方法の特許を得、さらに松葉を原料に滋養に富んだ酒類を醸造する特許を出願した。そして同年七月、本庄村深江二三七番地に転居した。

この松葉酒は、大正十二年以来交友のあった小説家菊池寛が、横光利一の小説にちなんで「紋章」と名づけ出資してくれたため、正太郎は「紋章本舗」という会社を起こした（図5）。図5には伊丹酒造の所に「紋章」があるが、浅野さんの記憶ではもう少し西側だった



図5 昭和10年代前半の永田家酒蔵と「紋章本舗」
（本庄小学校昭和13年卒業生が2001年の喜寿同窓会で記憶を頼りに作成、卒業生の一員の八木利支雄氏がまとめた。大西令子さん提供）

たという。また、永田家の本宅の土間にも一室を設け、工場の従業員を住まわせたという。さらに江田醸造研究所（現神戸市灘区岩屋南町三）に委託して自ら指揮を取って、松葉酒醸造の工業実験に成功、永田家の蔵で濾過して瓶詰めした。昭和十一年九月十四日、大阪朝日新聞は「科学戦士がまたも世に問う松葉酒。小説『紋章』の主人公長山氏苦心の研究に凱旋」と報じた。

昭和十一年十一月四日には「紋章」の醸造開始と『魚畜類之新利用法』出版を祝う会を「紋章本舗」で開催した。翌十二年一月、明治屋と松葉酒の全国一手発売元の契約を結び、四月八日には大阪市堺筋本町、明治屋ビルで「紋章」の試飲会を開いている。試飲会には菊池寛、吉川英二なども駆け付けた。六月九日には結婚、翌十日付「大阪朝日新聞」には、「紋章の主人公めでたく結婚 新婚旅行

にも親孝行 花嫁さんと母親が記念見物へ 花婿さんは留守番役」という見出しで婚礼の写真まで掲載している。

この記事が大阪、東京の両朝日新聞に掲載されたこと、報道陣が多数押しかけたことから、当時の注目ぶりがうかがえる。松葉酒はこの年八月から翌年三月までに二・三石を醸造、アメリカ、フィリピン、中国、満州にも輸出された。十一月十四日には、第五回特許局発明展覧会で、生松葉から滋養飲料を醸造する方法について特許局長官の鑑査合格証を与えられ、翌十三年三月三十一日には、発明奨励国産代用品工業展覧会に出品して帝国発明協会大阪支部長から感謝状を受けている。六月には松葉から滋養に富んだ酒類を醸造する方法で特許を受けた。

浅野さんは昭和十二年から明石女子師範学校の寄宿舎にはいっており、この年か翌年に、長山正太郎が『紋章』の主人公として『婦人公論』に取り上げられ、家の前で従業員と写した写真が掲載されたという。昭和十二年の『兵庫県工場一覽』には従業員五人以上の工場として「紋章本舗」が掲載されている（『本庄村史』五九五頁）。ただし『兵庫県工場一覽』は事業開始を昭和十二年三月としている。

しかし、日中戦争拡大が経営を大きく圧迫、昭和十四年には米不足となり、清酒製造は制限された。その一方で合成酒の醸造が増大した。松葉酒の醸造を委託した江田醸造研究所は合成酒の専門となっていたため、「紋章」の醸造は従来のわずか七・五％に制限された。さらに昭和十八年には戦火が激しくなり、「紋章」の自由販売は禁止、昭和二十年正太郎は陸海軍への納入を模索し受注に成功するが、アルコールが航空機の燃料となり失敗。戦後は米軍第八軍司令部への納入や、米国・中南米への輸出も試みるがいずれも成功せず、昭和二十三年横光利一の葬儀には生活難で参列すらできなかった。同じ年、長らく支援してくれた菊池寛も死去、香典がなく松葉酒二本

を霊前にささげた。正太郎が松葉酒の自由販売ができなくなっからは、永田酒造の旧酒蔵は軍服を縫う工場になったり、戦後は西隣の佐久間家が海岸からパイプを引いて製塩工場として利用した。

昭和二十四年十二月、雑酒の自由販売が許可され、正太郎は松葉酒の醸造を再開した。ただ六年間の休業のため永田家酒蔵は利用せず、醸造だけでなく濾過・瓶詰め・販売も江田醸造研究所に委託したが失敗、醸造を中止した。結局昭和二十六年、正太郎は静岡県大仁町の東洋醸造会社社に「紋章」の所有権を譲り、自身は嘱託として同社に入り、翌二十七年三月、「紋章本舗」を閉じた。十月には大仁町の東洋醸造社宅に転居、深江時代に幕を降ろした。

深江は苦労人の発明家長山正太郎の栄光と挫折の舞台だったのである。

【参考文献】

- 南 信一「小説『紋章』の研究——長山正太郎氏（雁金八郎のモデル）の体験記並びに論文らとの対比を中心として」『静岡大学教育学部研究報告』第一三三号、一九六二年
- 川崎松寿「日立文学地図覚（二）雁金八郎と長山正太郎」郷土ひたち文化研究会『郷土ひたち』第一〇・一一号、一九六四年
- 井出恵子「『紋章』のモデルたち」仏教大学国語国文学会編『京都語文』第五号 二〇〇〇年
- 長山靖生『奇想科学の冒険 近代日本を騒がせた夢想家たち』平凡社新書三七九、二〇〇七年

夙川八景

——打出焼——

史料館研究員 藤川 祐 作
史料館研究員 樋口 元 巳

八景が描かれた打出焼

前回打出焼については、筆者が過去に作成した年表に沿って打出焼の歴史を紹介した。今回は、阪急電車夙川駅前で昭和十三年（一九三八）から和菓子業を営む「成田屋」さんが所蔵する「夙川八景」を紹介する。成田家すなわち二代目の奥徳栄さんのお話では、父が友人から譲り受けたもので、友人とは、打出焼の素焼きされた小皿に絵付けをされた本名はわからないが、聴雨庵（画名）さんで、夫人のみね子さんがそれぞれの景色を和歌に詠んでおられる。

ご夫婦は、夙川在住で、夙川を題材に広く絵・歌を深化された中から、「夙川八景」が生まれたのではないかと理解している。

小皿はほぼ一三cm四方で、高さ二・三cmを計り、各作品の右肩が内側へ三・五×四cmで折り重ねている。小皿は轆轤を使わず、布を下地に手の甲で一定の厚さに整え、指先などで微妙に成形し、ヘラ状のもので余分なものを切り取り、正方形にした後、若干の丸みをつけたものと思われ、八枚とも外面までは、釉薬をかけておらず、布目の跡が残っており、ほぼ中央に「うちで」と小判印が記されている。また、これより大きい二二cm四方のタイプもある。

おそらくたくさんの方が、窯を訪れたであろう。今日のように陶芸教室などなかった時代、前述したように、いろいろな素焼きの作品に各自が思い思いの絵付けをし、後日再窯し、本焼された作品を持ち帰ったことと思われる。

（藤川祐作）



夙川八景の描かれた打出焼

みね子氏讃の「夙川八景」和歌について

景勝の地を選んで三景・八景・百景などと称美する事は、日本三景・近江八景・富嶽百景などでよく知られている。八景では近江八景が早く、また最も有名である。他にも南都八景・金沢八景・嵯峨八景・明石八景・日本八景など数多である。近江八景は中国の瀟湘八景を模して選定されたものであり、当該の夙川八景は、近江八景に倣ったものである。左に瀟湘八景（上段）、近江八景（中段）夙川八景（下段）を対比してあげておく。

| | | |
|------|------|----------------|
| 平沙落雁 | 堅田落雁 | 内澱鳥声 |
| 遠浦帰帆 | 矢橋帰帆 | 打出帰帆 |
| 山市晴嵐 | 粟津晴嵐 | 堤塘晴嵐 |
| 江天暮雪 | 比良暮雪 | 武庫暮雪 |
| 洞庭秋月 | 石山秋月 | 甲山秋月（絵皿では甲陽秋月） |
| 瀟湘夜雨 | 唐崎夜雨 | 夙川夜雨 |
| 煙寺晚鐘 | 三井晚鐘 | 聖堂晚鐘 |
| 漁村夕照 | 瀬田夕照 | 池畔夕照 |

現在、西宮または夙川地区に夙川八景と言われるものは無く、過去にも無かったようである。絵皿が五枚、十枚でなく、八枚だという事は、八景を念頭に置いたものに違いない。聴雨庵の絵にみね子氏が讃をして詠んだ歌を紹介する。掲載する写真の順序とは異なるが、先の順序に従って歌をあげる。仮名に適宜濁点を打ってみた。

内澱鳥声 あめこやむ 軒ばもくちし 芦すだれ
みづのもかけて 小鳥よびかふ
雨も小止みになり、水の面に小鳥が飛び交っている。内澱というのは、内澱池、今の片鉾池である。当時は、現在の倍の広さがあった。『西宮市史第一巻』（三五八頁）に「内澱池また山の神池とよばれる池」の記事が見える。片鉾池に落雁は無理だが、二羽の鳥は小

夙川八景

みね子

甲山秋月
 月とせりすみの成たすらのそと
 風所書曰
 石つみの音もなたてぬもつたに
 くららもほろろの杉めさくららに
 由良暮雪
 あえいやむ新しはらへり
 くららもほろろの杉めさくららに
 武庫暮雪
 中ははる方えもけあち
 ま率山うけてうそ務わち
 打出帰帆
 出帆のちもさつとつらうら
 うららもほろろの杉めさくららに
 堤塘晴嵐
 不れいと和名晴れてゆらん
 うそとせりすみの成たすらのそと
 聖堂晚鐘
 夕鐘の音もなたてぬもつたに
 くららもほろろの杉めさくららに
 池畔夕照
 夕映の音もなたてぬもつたに
 くららもほろろの杉めさくららに

みね子氏讃の夙川八景

鳥とも思えぬ。池の脇の夙川公民館は、昭和三九年（一九六四）に松下幸之助が寄附したものである。

打出帰帆 山風の 吹きも送るか とほうらの

うち出のなみま しらほかけそふ
打出の遠浦に、山風が吹き波間に白帆影が見える。夙川地区から遠浦を望んだのである。

堤塘晴嵐 ほのゝと 松原晴れて ゆくひとの

たもとのどけき 春のあさかせ

松原はほのほのと明け、春の風は行人の袖をのどかに揺らす。堤塘はつつみ、土手である。漢詩では、池・湖をも指す事があるようだ。川あるいは池に架かる橋上に隠者らしき行人が何かを担いでいる。橋ではなく土手かも知れない。何処なのだろう。片鉾池は既に出て、夙川は次に出る。同じ所を詠むのも面白くなろう。夙川でないとすると、池である。皿池・曙池などがあつたが今はない。

武庫暮雪 ゆきになる をち方寒き はつあらし

武庫山かけて うす粧ふも

初嵐に武庫の山にかけて薄く化粧している。遠浦に対し、遠山を詠んだのである。初嵐は、本来は旧暦七、八月に吹く風である。

甲山秋月 たぐひなき こゝろも秋の 甲山

月も真すみの をちこちのさと

甲山を照らす月影の如く、心もたぐいなく澄んでいる。三日月では、月も真すみがちと苦しい。甲山も厳密に言えば、夙川に入らない。

夙川夜雨 石ぶみの 音だにたてぬ よるの雨に

こゝろもほそき 水のをぐらき

音もなく、石碑をぬらして降る静かな夜の雨に、小暗き川の水ももの寂しい。石ぶみは石碑、絵にも描かれている。公民館脇の川沿

いに「慈悲塔」と彫られた石碑があつて、形はよく似ている。

聖堂晩鐘 夕つくる かねのひびきも たえがてに

ちるかこぼる、花三つ二つ

鐘の響きにも堪えがたげに花が散る。聖堂は霞町の夙川カトリック教会である。昭和七年（一九三二）に完成している。以前は木造であつた。教会の西南にかつて曙池があつた。

池畔夕照 なぎき日を 柳の糸に くりかけて

夕映にほふ いけの面かな

柳の糸に繰りかけて、夕映えが池を染めている。柳が描かれるばかりである。何処の池なのだろう。

この夙川八景は、聴雨庵が当座に創つたものなのだろうか。夙川の地域も厳密に考える要もあるまい。この辺りといった感じでよいものなのだろう。かつて夙川区があつて、現在も夙川地区という言葉がある。昭和七年（一九三二）に、香櫛園区を改称して夙川区とした。阪急電車の駅名に合わせたのである。今の羽衣町・霞町・松園町・相生町・雲井町・殿山町・高塚町・大谷町・深谷町・木津山町に当たる。夙川地区と言われるのは、かつての大社村大字森島下に属す蓮毛・山畑・奥畑・北蓮毛・久出・皿池・中山田・深谷・木津などの字であるという（『夙川地区一〇〇年のあゆみ』夙川自治会編）。

近江八景は、早く風景が無くなって実状と齟齬を来たし、昭和二四年（一九四九）には新たに琵琶湖八景が制定されている。夙川八景の内、今何が残るであろう。（樋口元巳）

最後になりましたが、こころよく資料紹介を快諾していただいた成田屋様には、厚くお礼申し上げます。

トライやる・ウィークと史料館

史料館研究員 水口千里

史料館では、兵庫県が実施している中学生の職業体験『トライやる・ウィーク』の受け入れに協力しており、本年度も六月四日、五日の二日間、岡田諒平君と辻村建志君が史料館の通常業務の体験をおこなった。体験は、史料館が独自に作成したタイムスケジュールに沿っておこなわれた。

後日二人から届いた礼状には、史料館での業務体験の感想が書かれていた。最も印象に残った体験は、一階の季節展示コーナーの展示替えだったようである。それまで展示してあった五月人形を梱包し収蔵庫に収納したあと、次の季節展示「夏の風物詩」に使用する資料を選び、テーマに即したレイアウトを検討した。使用した資料は、団扇、ガラス製蠅捕り器、蚊取り線香・豚の蚊遣り、朝顔の造花、風鈴、虫取り籠、組み立て式の昆虫模型、手動式カキ氷機、食品サンプルのカキ氷、ラムネ瓶、夏用のお櫃などである。

二人とも以前から歴史への関心が高かったこともあり、展示や資料台帳作成の体験で、単に名称や使用方法だけでなく、その資料を



▲岡田諒平くん

辻村建志くん▼



使用していた時代の生活などを勉強できたことが歴史の勉強にも役立つようである。史料館での二日間の体験を経て、二人がこれまで以上に地域の歴史に興味を抱いてくれたので、受け入れ側である史料館にとっても有意義な二日間であった。

◇平成二一年度 本庄中学校 トライやる・ウィーク

タイムスケジュール 六月四日(木)・六月五日(金)

*6/4(木)

9時30分～10時

生徒来館、担当者からの説明

○史料館概要と二日間のスケジュールの説明

○史料館の通常業務についてのガイダンス

10時10分～12時

資料整理の体験①

○資料の取り扱い方法の学習

○資料の撮影、画像処理、台帳記入

12時～13時

昼食

13時～13時50分

収納作業の体験

○展示中の五月人形を点検し、収蔵庫に収納

○季節展示「夏の風物詩」のプラン作成

14時～14時50分

展示の体験——季節展示「夏の風物詩」

○作成したプランにもとづき実際に展示

14時50分～15時

今日の体験のまとめ



上 完成した季節展示
下 雑誌の目録作成

*6/5(金)

8時30分～9時15分

生徒来館、指導担当者からの説明

9時15分～10時15分

○本日のスケジュール

事務処理の体験①

○「史料館だより」送付用宛名シール貼付

10時30分～12時

○名簿とのチェック
事務処理の体験②

12時～13時

○「山陽ニュース」の整理、目録作成

13時～14時

○史料館ホームページの閲覧

14時10分～15時

○博物館ホームページの閲覧
博物館施設の情報発信の体験

13時～14時

○史料館のフラッシュ、ホームページについての意見交換

14時10分～15時

○二日間の体験のまとめ
レポート作成

15時～16時

○レポート作成

資料登録カード刷新

— データベースとの連携 —

史料館研究員 水口千里

開館以来使用していた資料の登録カードの残部が僅かになったので、増刷するにあたって大幅な改定した。特に留意したのは、原稿B5サイズからA4サイズへの変更、データベース作成の際の便を考慮し項目の階層を明確にする、カードの表面だけで基本情報が得られるようにすることである。また、各項目の記入欄の右端にチェック欄を設けた。そこにチェックがあれば、付帯する詳細情報が裏面にも記載されていることを示している。現存する資料のほとんどが旧カードのままであるが、新カードの利便性、有効性が認められるようであれば、いずれ旧カードからの転載をおこなうと同時に資料の再確認も実施する。今後の新カード使用状況については、機会を得て報告したい。

| 資料登録票 | | 資料種別 |
|-------|--------------------------|------|
| 資料番号 | | 書 |
| 種別 | <input type="checkbox"/> | 本 |
| 著者 | 氏名 | 種別 |
| 編者 | 氏名 | |
| 発行者 | 氏名 | |
| 発行年 | 月 | 日 |
| 発行部数 | 部 | |
| 冊数 | 冊 | |
| 収録時間 | 分 | 秒 |
| 収録言語 | 言語 | |
| 収録形式 | 形式 | |
| 収録内容 | 内容 | |
| 収録方法 | 方法 | |
| 収録時期 | 時期 | |
| 収録場所 | 場所 | |
| 収録経緯 | 経緯 | |
| 収録趣旨 | 趣旨 | |
| 収録備考 | 備考 | |
| 収録担当者 | 担当者 | |
| 収録日 | 日 | 月 |
| 収録場所 | 場所 | |
| 収録時間 | 時間 | |

新しくなった資料登録票

史料館だよりのPDF形式による電子化と公開

史料館研究員 高田 祐一

はじめに

神戸深江生活文化史料館では、一九八一年より調査研究の発表の場として史料館だより『生活文化史』（以下、史料館だより）を年一回程度発行している（発行頻度は時期により異なる）。今号で三八号を迎え、別冊を含めると通算四二号となる。二〇一〇年二月にこれらの四二号の史料館だよりをPDF形式にて電子化した。本稿では、この史料館だよりの電子化について報告する。

PDF形式による電子化

通称PDFこと、Portable Document Formatとは、アドビシステムズ社によって一九九三年に規格が発表された。PDFは、電子文書のためのフォーマットであり、OSなどの環境を意識せずに、文書の作成、閲覧、印刷を行え、デファクトスタンダードとなっている規格である。二〇〇八年七月には、国際標準化機構（ISO）によってISO標準（ISO三二〇〇一）に認定され、名実共に正式な標準となり、仕様も公開されている。PDFの特長は、現物の紙資料を電子化した際に、レイアウトを保持したまま電子化を行えることである。そのため、電子化のための組版を行う必要がなく既存の紙資料を効率よく電子化できる。また紙の現物資料をPDF化した際は、原則的に変更ができない。さらに電子署名機能を持ち、偽造・改竄を防止できるため、公証性が高いといえる。

電子公開

現在、史料館だよりの配布方法は、関係機関・個人への直接送付、館内でのバックナンバーの配布等である。直接配付により、目に留まる可能性は高い。しかし史料館だよりは、無料配布のため、コストをかけ増刷することが難しい上、遠隔地では入手が難しい。

そこで現在の配布方法を補完するため、史料館だよりを電子公開することにした。二〇一〇年夏ごろに史料館のWEBサイトにてPDF形式で公開する予定である。電子公開により残部数を気にする必要がなくなり、インターネットにつながれば、いつでもどこでも入手可能かつ閲覧可能になるため、物理的な制限も解決できる。デジタルデータのため劣化することなく半永久的に保存が可能である。ただしPCディスプレイでの閲覧は、紙媒体に比べ見読性が低く、閲覧者に負担をかける。そもそも史料館だよりのPDFの存在自体を知らなければ、探すこともない。情報を必要としている人に、必要な情報を、必要な時に届けられる仕組みを作ることが課題になるだろう。

おわりに

二〇〇五年四月一日施行のいわゆる「e-文書法」において保存が義務付けられている文書の電子保存が認められた。中央省庁においてもWEBサイトにてPDFで情報公開を行っているように文書の電子保存・公開が広まっている。PDFは、名実共に標準であり、効率よく電子化を行え、比較的公証性が高い。将来的にPDFが陳腐化し、他フォーマットに移行する可能性があるが、デファクトスタンダードになっている上、ISO標準のため、互換性が確保される可能性が高い。PDF形式による電子化に過度に慎重になる必要はない。しばらくの間、紙文書と電子文書の併存によって相互補完を図ることになるだろう。

深江文化村講演会と 「深江塾」の始動

史料館館長 大國 正美

深江文化村を顕彰する看板が、隣接する神楽公園に立てられたのに合わせて、九月六日、深江会館で講演会「知ってる？ 深江文化村」を開催、甲南大学の井野瀬久美恵教授が「深江文化村——地域再生の可能性」と題して講演した。今年生誕一〇〇年を迎える貴志康一が音楽的な素養を育んだ場で、会場では貴志の音楽も流した。自治会とタイアップした催しで反響は大きく、二三〇人ほどの参加があり、別室にプロジェクトを設置して収容したがそれでも収まらず、聴講を断念して帰る人まで出る賑わいとなった。

講演の成功を受けて、歴史と文化をもとに地域起こしをするグループ「深江塾」が生まれ、現在住民十一人と館長、副館長で組織し、毎月定例会を開いて、シンポジウムの継続開催や、地元に残る文化遺産の活用、深江ゆかりの人物誌の調査・編集の三本立てで活動を続けている。

深江文化村はこれまで建築史の観点から注目され、『本庄村史』でも建築物の記述がもつぱら。そこに、人が住まい生まれた文化については十分な調査が行われていない。

井野瀬教授は、ロシア革命でロシア人音楽家が日本へ亡命、関東大震災、一九二五年の大阪のラジオ局開局などもあって、ロシア人音楽家が関西に移住、深江文化村を生む背景になったことを説明。さらに朝比奈隆の生涯を変える影響を与えた指揮者エマニエル・メッテル、ピアノリストのアレクサンダー・ミハイリビッチ・ルーチン、

ルーチンの異母弟でバイオリンの巨匠アレクサンダー・モギレフスキーなど、多彩な顔ぶれの音楽家がこの地に集ったことを強調した。さらにロシアからの経由地のハルピンが亡命者のルートになり、音楽交流が行われたことを報告した。

そして関西の音楽風土として官立の音楽学校で学ぶのではなく、民間の音楽交流の中で才能を開花させた人が多く、深江文化村は、大正から昭和にかけて、関西のさまざまなネットワークの重なりによって民間の音楽ネットワークを広げ、若い音楽家を世界に押し出した文化空間だったと結論づけた。

講演会を受けたアンケートで、「何か文化活動を続けたい」と答えた人を中心に、「深江塾」を立ちあげ、原則第二土曜の午後から深江史料館で定期的な会合を開いている。

今後の方向性として、①講演会やシンポジウムの定期的な開催の模索②深江にゆかりのある近現代の人物で、『本庄村史』にも登場しない人物の掘り起こしと顕彰③深江にある洋館・元小寺氏邸（現太田酒造迎賓館）を所有者の協力を得ながら公開・活用する企画の三点を軸に意見を重ねている。

太田酒造迎賓館については会社側も理解が厚く、三月二十七日に深江塾のメンバーだけで見学会を催した。また①の講演会の準備として、まず深江塾のメンバーが町の記憶を語りあい、記録していくことでも合意。大正後期から震災後までを七つに時代区分、毎回思いのテーマで話題を提供していくことになった。

また史料館の小学校の団体見学にも協力してもらうことになり、今年度はまず補助的に参加、今年の秋までに基本的なマニュアルを作ることも合意した。今後も一層地域とタイアップした史料館運営を模索していきたい。

史料館日誌抄

史料館副館長

道谷

卓

平成二十二年四月以降

△平成二十二年▽

5月16日▽ 新型インフルエンザのため臨時休館

22日

6月4日▽ トライやる・ウィーク（本庄中学校二年生二名を受け

5日 入れ、二日間史料館の業務を体験してもらう）

6月25日 東灘区役所新規採用職員研修（見学者 二〇名）

7月25日 東灘区役所・わくわく親子歴史探検隊

（見学者 二〇名）

9月6日 深江文化村講演会（深江会館、参加者 二二〇名）

11月17日 大手前大学（見学者 一六名）

12月11日 東灘小学校 三年生（見学者 一六五名）

12月18日 福住小学校 三年生（見学者 七五名）

△平成二十二年▽

1月12日 六甲アイランド小学校 三年生（見学者 八六名）

1月18日 西灘小学校 三年生（見学者 九二名）

1月19日 摩耶小学校 三年生（見学者 八七名）

1月22日 本山第三小学校 三年生（見学者 一三四名）

1月25日 本山南小学校 三年生（見学者 九九名）

1月26日 福池小学校 三年生（見学者 一四八名）

1月28日 水木小学校 三年生（見学者 五八名）

1月29日 本庄小学校 三年生（見学者 一〇六名）

宮本小学校 三年生（見学者 二四名）

2月1日 魚崎小学校 三年生（見学者 二五八名）

2月2日 向洋小学校 三年生（見学者 八六名）

2月5日 なぎさ小学校 三年生（見学者 一九〇名）

2月8日 御影小学校 三年生（見学者 一一二名）

2月12日 灘小学校 三年生（見学者 六四名）

2月13日 アメニテイホーム夢野（見学者 一七名）

2月18日 本山第一小学校 三年生（見学者 一五二名）

2月19日 兵庫大開小学校 三年生（見学者 一四六名）

2月28日 荒田小学校 三年生（見学者 二一名）

3月4日 甲南小学校 三年生（見学者 五九名）

資料寄贈者ご芳名

（敬称略・二〇〇九年寄贈分）

織田芳一・吉永信・鈴置二郎・堀江眞理子

（藤川祐作記）

編集後記

久しぶりに本誌の編集をさせていただきました。

『本庄村史』が刊行されましたが、史料館では、引き続き地域に根ざした歴史の調査研究を行ってまいります。

昨年二月に当館事務局員の田部美知雄氏が永眠されました。ご冥福をお祈りします。（望月）

『生活文化史』 第38号 10・3・31

編集／大国正美・望月 浩

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-145314980（FAX兼用）

<http://homepage2.nifty.com/fukae-museum/>